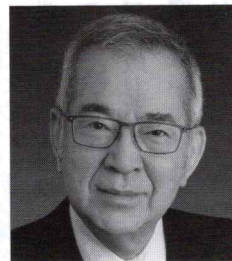


## ポリュビオスと小栗上野介忠順 — 個別の歴史と全体の歴史

山内昌之

■ 東京大学名誉教授



幕末から明治維新にかけての日本史は、ギリシア人のポリュビオスが前二世紀に書いた『歴史』の表現を借りるなら、運命の営みのなかでもとりわけ見事であり、しかも教訓に富む出来事を引き起こした時代であった。ペルシア戦争やカルタゴ戦争のように、片方の国や王朝が減んで史料が散逸した事例はともかく、戊辰戦争では薩長と徳川の双方関係者の証言も残され、明治以来の官民の真面目な史料の収集と編纂も進められた。

それでも、運命のいたずらで肉声の叫びや肉筆の書信がほとんどない有名人もいる。来年のNHK大河ドラマの主人公、小栗上野介忠順もそうした不幸な一例にほかならない。

いわゆる薩長中心史観からすれば維新の三傑は、西郷隆盛・木戸孝允・大久保利通になる。他方、幕府中心史観に立つなら「特に一際勝れた人物」として岩瀬忠震・水野忠徳・小栗忠順の幕府三官僚を「幕末の三傑」とする者も少なくない（福地桜痴『幕末政治家』）。

また、政体循環史観のポリュビオスに学ぶなら、かつて生命を帯びていた美しい全体の歴史がばらばらになったとしても、それを打ち砕いた部分の力だけで歴史を判断し、全体的に改革を通して歴史の再編成を目指した力を無視するのは、歴史を立体的に理解できないだろう。意外なことに徳川政治史では、爛熟を極めた文化文政の十一代將軍家斉の治世を「盛事」として高く評価する者が幕末維新期に多く出たのも不思議である（拙著『將軍の世紀』下）。

その後に出現した「改革的政治家」として、天保の改革の水野忠邦、開国を決断した井伊直弼を挙げるのは、薩長中心史観にとらわれず二百七十年のバクス・トクガワナ（徳川の平和）の深層を考えるなら大いに説得力をもつのではないか。小栗を二人と遜色なく並べる人物もいる。「剛毅直裁、堅忍の美德を具へ胸間一定の成算ありて左右を顧ず世論に閑せず事破れ身滅ぶに至りて止めり」。

このように、三人の性行を並べて大物の幕末三傑にしたのは、雑誌『旧幕府』を出した戸川残花であった。島崎藤村や樋口一葉の世話も焼いた旧幕臣の基督教徒文人にほかならない。小栗がもし同じ譜代でも旗本でなく大名の家に生まれていたら、井伊直弼の後に「快手腕を振ふ可きは斯人なりしならん」と大いに小栗の事績を喧伝したものだ（戸川残花「史伝小栗上野介」①『旧幕府』四の七）。

小栗が「幕末の三傑」に名を連ねただけでなく、水野忠邦や井伊直弼とともに大物の「改革的政治家三傑」と称されたのは愉快ではないか。小栗は、何の取調もなく無慚に官軍の手で斬られて終わった。小栗のような人物を正確に理解してこそ、個別の歴史は、「全体についての理解と確信のためには、ほんのわずかしが役に立たない」というポリュビオスとも議論できるのではないか。こういう期待をもつて小栗上野介忠順のことを考えている毎日なのである。